

未熟のまま収穫 フェロモン誘発

リンゴ害虫 無農薬で抑制

弘大・城田准教授 「放任園対策に」

弘前大学農学生命科学部の城田安幸准教授(64)は15日、農業散布をしないリンゴ園でモモンクイガなど害虫の発生を抑制する研究成果を発表した。成熟前の未熟状態でリンゴを収穫することなどにより、害虫の繁殖を防いだ結果、発生数は数年で激減した。城田准教授は「農家の高齢化などで今後増える放任園を、無農薬未熟リンゴ果樹園として活用できるのでは」と提唱している。

(秋元宏宣)



青森市のほ場で無農薬栽培による害虫抑制の研究成果を説明する城田准教授

城田准教授は2007年、

7年から、青森市など県内数カ所に無農薬リンゴ栽培の有機農業現場を設け、病虫害管理の研究を行っている。研究ほ場で08、10年の3年間、農薬を散布せず、園内に性フェロモンを誘発する約30センチ四方の粘着材を設置した上で、7月中旬、未熟リンゴの状態を収穫。

その結果、08年に粘着材にかかったモモンクイガの1週間当たり捕獲数が平均188匹だったのが、09年は47匹、10年は15匹と減少したことが判明し

一方、これまで果実

の結実に芳しい結果は出ていなかったが、食用酢を10年に2回、1年に1回散布し、有機堆肥を樹木周辺にまいたところ、5年目の今年、ほとんど病害のない果実が生育した。

城田准教授は04年、未熟リンゴには成熟果実の5、10倍のポリフェノールが含まれることを発見。未熟リンゴ25%と成熟リンゴ75%のジュースの「医果同効」と話している。

源」を開発、免疫力を高める免疫賦(ふ)活剤としての特許を取得している。

15日、青森市の研究ほ場で成果発表した城田准教授は「無農薬で成熟するまで育てるには課題が残るが、未熟加工用原料としては十分、使える」と指摘。

「06年には有機農業推進に関する法律が施行された。無農薬未熟リンゴ園として放任園を再活用する方策は有効」と話している。



陸奥新報

7月16日
月曜日

©陸奥新報社2012

放任リンゴ園活用提案

弘大・城田
准教授 未熟果、無農薬で

弘前大学農学生命科(64)「進化生態学」は
学部の城田安幸准教授 15日、無農薬リンゴの



無農薬リンゴ栽培の研究圃場を公開した城田准教授

栽培研究をしている青森市浪岡高屋敷の圃場を公開した。城田准教授は重要害虫のモモンクイガについて、フェロモントラップを活用し未熟果のうちに収穫することで、発生を抑制できるとした研究成果を公表。放任園を

未熟果栽培に転用し、未熟果を使ったジュースの増産に道が開けると提案した。

城田准教授らは数年間農薬を散布していない同市内の別の畑で、7月中旬に全果実を収穫した場合のモモンクイガなど3種のガの個体数の推移を調べたと

ころ、2008年から10年の間に個体群密度が10分の1となった。実験結果は日本応用動物昆虫学会で発表した。

今回公開した圃場も同様の栽培方法に取り

組んでおり、希釈した食用酢の散布や窒素補給用堆肥の施肥を行ってきたが、農薬は5年間不使用。軽度の病害が発生したものの、免疫力で立ち直ったふじやシヨナゴールドの青い実がなっていた。

城田准教授は「成熟果の収穫をどうするかという課題はあるが、未熟果の栽培用としては十分。放任園を未熟果用に転用できる」とし、未熟果汁を使ったジュースの増産が視野に入るとも述べた。

(渋谷 弘一)